

『洪武正韻』 依據方音は 温州音である

望 月 眞 澄

I ; 序論

論者は、かつて「『洪武正韻』 依據方言」(1994)において「『洪武正韻』は實に忠實に生きた言語を採録することに努めたのである。{雅音}で決定というのは讀書音・白話音の二重性を折衷して纏め上げた作業を指して言っているのである」と述べた。本論では、更に進めて「生きた言語」は何なのかを考察する。

従来、『洪武正韻』の依據字音は何であるかについてさまざまな議論があった。

王力『漢語音韻學』(1936・1956)から、この主要な論点を取り出し、箇條書きすれば次のようになる。

『洪武正韻』は明、樂韶鳳などの奉勅による編集において、

- ①その撰述者たちの出生地から知れるところはみな南方人である。
- ②『洪武正韻』は、むしろ却って新たに一字一字を評價し、新たに分類しなおしたものである。

(例)

離・彌(舊支)、尼・肌(舊脂)、基・欺(舊之)、機・幾(舊微) → (齊)

規・危(舊支)、追・推(舊脂)、歸・揮(舊微) → (灰)

このように自由な合併法は『中原音韻』と同じである。しかし、どの字をどの部に歸屬させるかは、『中原音韻』とはまた多くの異なる点がある。

- ③『洪武正韻』は決して當時の中原音を代表しているということはあり得ない。しかもおそらく一地の音ではなく、多くの方言の入り混じったものであろう。
- ④『中原音韻』は、おおむね當時の中原音の實録であろう。

『中原音韻』には既に濁音聲母はない。であるのに、50年後の中原にまた濁音聲母が復活することはあり得ない。

『中原音韻』には既に入聲がない。であるのに、50年後にまた入聲がある
と言うことはあり得ない。

『中原音韻』には既に{寒}{刪}は分けていない。であるのに、50年後に
また分けるということはあり得ない。

循環變化のあり得るか否かは、しばらくは問わないにしても、50年という
短期間に實現可能なことではない。

- ⑤錢謙益『洪武正韻序』等で、「明の太祖がこの書を全てが全て善しとしな
い」と言っているが、おそらくそれは『洪武正韻』が中原音と符合しない
からということだけではないだろう。

などである。

また、張世祿『中國音韻學史』(1938・1968)では、

『洪武正韻』の分部は『中原音韻』と合うが、その他の方面から見ると、
決して純粹に北音系統に屬しているのではない。宋濂序に記載するところ
によれば、この書の撰述に参加した人はみな南方人であり、北音區域、中
原に生まれ育った者ではない。であるから宋序に「復恐拘於方言無以達於
上下」とあるのは、正しく本書の内容が南方方言音の參雜を免れないこと
を示している。同時にまた「以三衢毛居正、昭武黃公紹之說爲據」とある
のは舊韻書の體例に對して當然妥協する點があつたということである。

と述べ、また、

『洪武正韻』は、また、舊韻書の體例に依拠するが、各字の下に注記する
反切は當時の改定した音の結果であつて、ある種の舊韻書を直録したもの
ではない。しかし、言語音の系統の面から觀察すると、本書の包含してい
る南方方音を見ることができる。表面上は宋序に「韻學起於江左、殊失正
音」と言うが、實際上はむしろ江左の吳音を採取しているのである。

と述べている。

本論では、この王力の慧眼、この澄明な張説に敬意を表するものである。

II ; 方法

本論では、『洪武正韻』序で、

有獨用當併爲通用者、如東冬清青之屬、ア（獨用の合併して通用すべきも
の、{東・冬}{青・清}の類のものがあるし）

亦有一韻當析爲二韻者、如虞模麻遮之屬、イ（また、1韻であつたものを、

分けて2韻とすべきもの、{虞・模}{麻・遮}の類のものもある)と述べている。

同じく『洪武正韻』凡例で、* () 内、筆者註

按三衢(浙江省衢縣)毛居正(『增修互註禮部韻略』1162)云、

『禮部韻略』有獨用當併爲通用者、

平聲如微之與脂、魚之與虞、欣之與諄、青之與清、覃之與咸。(中略)是也。

有一韻當析而爲二者、

平聲如麻字韻自奢字以下(中略)是也。

(中略)

又按昭武(福建省邵武)黃公紹(『古今韻會舉要』凡例:1297)云「禮部舊韻所收一韻之字而分入數韻、不相通用者。有數韻之字而混爲一韻、不相諧者、不但如毛氏所論而已」

と『增修互註禮部韻略』『古今韻會舉要』などで言う、韻目の統合・分析状況を指摘した上で、自らの著書『洪武正韻』の特筆すべき内容について、

今竝遵其說、以爲證據、其不及者補之、其及之而未精者以中原雅聲正之。

如以冬鍾入東韻、江入陽韻、挑出元字等入先韻、翻字殘字等入刪韻之類。

(今は前記2著作の説を證據にして、不足する部分は補充し、不足しないにしても精確でない部分は、中原雅音で正した。{冬}{鍾}韻を{東}韻に入れる。{江}韻を{陽}韻に入れる。「元」の字などを選び出して{先}韻に入れる。「翻」の字「殘」の字などを{刪}韻に入れるの類である)

と述べている。

これら序文・凡例で編者が明らかに特筆する點を追跡調査してゆくのも1つの有効な方法であろう。

即ち、主要課題としては

○{虞模}韻(序指摘)、{麻遮}韻(序・凡例指摘)は、實際『洪武正韻』上でいかなる分布をするか。

○「翻」「殘」(凡例指摘)は、『洪武正韻』内でいかなる位置を占めるか。などである。

これには辻本春彦『廣韻切韻譜』(1986)を基本的な枠組みに取り、これに佐々木猛『增修互註禮部韻略切韻譜』(1996)が整理した韻譜を重ね、更に『洪武正韻』の所屬韻目・反切・温州音などを記入した5つの『韻譜』を

作成した。

III；本論

III-1：『廣韻切韻譜』の開口麻II → 『洪武正韻』の15麻
麻IIIIV等 → 『洪武正韻』の16遮

『廣韻切韻譜』では麻韻は、第29圖開口のII等III等IV等に分布する。

例；II等嘉 = 古牙切（『廣韻』反切）

居牙切（『增修互註禮部韻略』反切）

居牙切（『洪武正韻』反切）

ko（現代蘇州音）

ko（現代温州音）

付表1では、この順序で上から記入した。吳音では、蘇州・温州音を、比較的包括的に調査している『漢語方言字彙』（1989）を利用した。資料の均質性という観点から今は便宜的にこの1書に拠る。

一覧して直ぐ判明するのは、『廣韻切韻譜』のII等{麻}韻組は、『洪武正韻』15{麻}韻組となり、これは温州音でこそみな/o/で對應分布している。同じ吳方言であっても蘇州音に対してはこれほどの美しい對應がない。

次に『廣韻切韻譜』のIII・IV等{麻}韻は、『洪武正韻』16{遮}韻組に記載される。そしてここでも温州音において、この{遮}韻となるものは、みな/ei/となる。それに對して、同じ『洪武正韻』16{遮}韻組でありながら、蘇州音では、III等韻で/o/、IV等韻で/iɔ/などとなり、温州音の對應關係の均一性には遠く及ばない。

即ち、『洪武正韻』15{麻}；16{遮}

温州音 /o/； /ei/

となる。

ところで『洪武正韻』{遮}韻のIII等は、原來、齒音にのみ分布し、現代温州音でこそみなIV等齒音と同音/sei/等となっているが、それならば、『洪武正韻』ではIIIIV等の區別がなかったかと言うに、當時においてはいまだなおIII等聲母そり舌音對IV等齒頭音の區別が何らかのかたちで存在していたということである。このことは反切がそれを區別して示していることから判明する。

なお付言すれば『洪武正韻』16{遮}去聲韻の「謝」「藉」の反切は共に

「詞夜切」とする。これは邪・從母の合流して區別のないことを意味しており、これもまた温州音でいずれも /zei/ となる現象に対応する。

同様に「蛇」=「石遮切」は、「石」常母が「蛇」船母と合流していることを示し、『洪武正韻』16 {遮} 韻にあっても常・船母は同一韻目中にある。

以上、本節では『洪武正韻』序が言う「一韻當析爲二韻者」の実態を明らかにし、それがまた温州音の実態に緊密に対応していることを明らかにした。

(註)

*表1中、黒體ゴシックは『洪武正韻』の {遮} 韻に属する。『洪武正韻』序が言う「一韻當析爲二韻者」を明示するため、明朝體15 {麻} 韻對ゴシック體16 {遮} 韻として表示した。

*『洪武正韻』に至って小韻表出字が異なれば、改めて加え記す。(例) 爬・杷は舊韻・『洪武正韻』の順。『洪武正韻』で小韻筆頭字を變更している。

*温州音などが不明のときは—で示す。*表示は平声のみ。

III-2: 『廣韻切韻譜』の模 I → 『洪武正韻』の5模

魚虞II・虞III (唇音) → 『洪武正韻』の5模

魚虞III (唇音以外)・魚虞IV → 『洪武正韻』の4魚

『洪武正韻』凡例で指摘する {魚} {虞} 通用は、現に『洪武正韻』において通用、合流している。

一方、『洪武正韻』序文「一韻當析爲二韻者」の舉例、{虞} {模} の方は、本来『広韻』も {模} {魚} {虞} に分けているのであるからこの序文の意味するところは俄かには理解し難い。しかし、これを表2のように示せば『洪武正韻』の実態は、歴然としてくる。即ち、

『洪武正韻』5 {模} 韻(ゴシック); 『廣韻韻譜』I {模} II {魚} {虞} III {虞} 唇音
4 {魚} 韻(明朝體) ; III {魚} {虞} (唇音以外) IV {魚} {虞}

のように2韻に分割すべきであると、實は指摘していたのである。III等 {魚} {虞} 韻に着目するとき、唇音對非唇音の對立で確かに2分されている。

『洪武正韻』5模; 4魚の2分は、大きくは直音; 拗音の對立であり、その内實はまた

5 {模} 韻温州音	牙音喉音 I	/u/
	舌齒音 I II	唇音 /ɔ̃y/ /əu/ /u/
4 {魚} 韻温州音	牙音喉音 IIIIV	/y/ /u/
	舌齒音 IIIIV	/l/

となり、この点において温州音もほぼ美しい對應を示し、これを反映していると言うことができる。

III-3: 『廣韻切韻譜』の開口I寒(牙喉音) → 『洪武正韻』の9寒
 I寒(舌齒音) II刪II仙III元(唇音) → 『洪武正韻』の10刪
 IV先IIIIV仙元(唇音外) → 『洪武正韻』の11先

先ず、{山}・{刪} II等重韻は中國音韻史の趨勢として『洪武正韻』においても合流する。{刪}韻「姦」小韻内に{山}韻「間」は含まれ(=居顏切)、同じく「刪」小韻内に「山」は含まれ(=師姦切)、共に『洪武正韻』{刪}韻になる。また、{仙} II等の「潺」は(=鉏山切)という反切を示し、同じく『洪武正韻』{刪}韻になる。ただし、『廣韻』{刪}韻の「顔=牛姦切」と『廣韻』{山}韻「虬」とは、独立して『洪武正韻』{刪}韻に並存して所屬する。これは、おそらく「虬」の冷僻なるがゆえ舊韻書を惰性的に登録しておいたものであろう。

『廣韻』{仙}韻の舌上音III等と正齒音III等とは、『中原音韻』にも見られるように、合流している。

『廣韻』	『增修互註禮部韻略』	『洪武正韻』
{仙} III正齒、 韻 諸延切 舌上、 韻 張連切	諸延切 張連切	諸延切 諸延切

これを含め、{仙}韻III齒音舌音の次の諸韻は、

羶=式連切	尸連切	尸連切
鋌=市連切	時連切	時連切
蟬=市連切	時連切	呈延切
然=如延切	如延切	如延切

となり、『洪武正韻』では、全て{先}韻に配置している。(註; このIII等舌齒音は、II等正齒音「刪」とIV齒頭音(<先>など)とが、既にスペースを占有しているので本論表3では便宜的に割愛した)

『廣韻切韻譜』の第21・23圖に、『洪武正韻』の9{寒}韻は黒體ゴシックで記入し、10{刪}韻は行書で、11{先}韻は明朝體で記入する。すると、

① I等{寒}韻の牙喉音は、『洪武正韻』の9{寒}韻に、そして温州音 /φ/ か /y/。

② I等{寒}韻の舌音齒音は、『洪武正韻』の10{刪}韻に、そして温州音 /a/。

小韻分屬状況だけでなく、反切下字使用状況にもII等韻字が用いられて、それが明示される。この反切特徴は『増修互註禮部韻略』までの舊韻には見られない。

例；単=都艱切、餐=千山切、殘=財艱切

特に『廣韻切韻譜』I {寒} 韻「珊」相當の小韻は、『洪武正韻』では「散」=相關切が示される。この反切下字の「關」は温州音で /ka/ と開口、蘇州音で /kue/ と合口で温州音II等性を示すことに拘るの感さえある。

③II等 {刪} {山} 重韻、II等 {仙} 韻「滌」、III等 {元} 韻輕唇音「翻」=孚艱切「頰」=符艱切（註；この唇音は表中に収容しきれず割愛）は、『洪武正韻』の10 {刪} 韻 となり、そして温州音 /a/。

④IV等 {先} 韻、IIIIV等 {仙} 韻、III等唇音外の {元} 韻は、『洪武正韻』の11 {先} 韻に合流した。そして温州音 /i/。

例；「延」{仙} IV羊母 ji 小韻=夷然切、以下には次の諸韻が同一韻として纏められる。

<言 {元} ㄋi=妍 {先} 疑母 ㄋi=焉 {仙} III影母 ji=沿 {仙} IV合羊母 ji=緣 {仙} IV合羊母 jy>

現代温州音の「言」「妍」は /ɲi/、「沿」は /ji/ で、合口「緣」は /jy/ で現れる。しかし、『洪武正韻』では同一小韻に纏めているのである。おそらく温州音圏内にこのような、allophon 異音を許すようなある地方があったものと想定しておきたい。

⑤では、『洪武正韻』凡例が「挑出元字等入先韻，翻字殘字等入刪韻（「元」字を {先} 韻に入れ、「翻」字「殘」字を {刪} 韻に入れる）」と特記する部分はどうなっているか。

「員」小韻=于樞切 {仙} III于母には、次の諸字を同一小韻内に一括して、『洪武正韻』11 {先} 韻に所屬させている。

<元 {元} 疑母 jy/ɲy=袁 {元} 于母 jy=緣 {仙} IV 羊母 jy=員 {仙} III于母 jy>

「言」；「元」は、開；合の対立として登録しているが、「緣」は開合いずれにも所屬していて、温州音に一般に見られる開合異音現象と呼應しているように思う。

要するに『洪武正韻』凡例の言わんとするところは、

	『洪武正韻』	『廣韻』	温州音
「元」	先韻	元韻III	白 jy、文ɲy

「翻」 刪韻 元韻III 白 fa、
「殘」 刪韻 寒韻I 白 za、文 dza

上記②のようにI等舌齒音はII等的になることと符合する現象を「殘」の例は特記していたのであった。

また、『廣韻』で同じ{元}韻所屬字も『洪武正韻』の唇音では、③の纏めのように{刪}韻に、牙喉音では、④の纏めのように{先}韻に所屬していることを特記しているのであった。これに温州音を参照すると、

{元}韻・牙喉→『洪武』{先}韻=願^{ny}、券^{te'y}、袁^{iy}、遠^{iy}

{元}韻・唇音→『洪武』{刪}韻=煩^{va}、反^{pa/fa}、飯^{va}、晚^{ma/va}、万^{ma/va}

となる。見たとおりこの凡例指摘は、これもまた温州音とよく對應することを強調したい。

III-4；『廣韻切韻譜』の開口去声のI代・II怪・夬、開口去声のI泰・II卦 → 『洪武正韻』の6泰

『廣韻』I等重韻の{泰}{代}は『洪武正韻』では、全て同じ{泰}に所屬させている。

また、『廣韻』II等3重韻{卦}{怪}{夬}は、

懈{卦}・戒{怪}=居拜切 温州音 ka (いずれも)

邂{卦}・械{怪}=下戒切 fia (械)

派{卦}・湃{怪}=譜夬切 p'a (派)

賈{卦}・邁{夬}=莫懈切 ma (いずれも)

などに見るように、『洪武正韻』では全て合流し、温州音もそれに對應した音分布 /-a/ である。

しかし、I等重韻では、舌齒音においては、『洪武正韻』の反切を子細に見れば、「泰」「貸」「蔡」「菜」の例を除くと、區別を示し、

例；帶=當蓋切 {泰} ta	；	戴=丁代切 {代} te
泰=他蓋切 t'a	；	貸=他蓋切 t'e
大=度奈切 da・dei	；	代=度耐切 de
奈=尼帶切 na	；	耐=乃代切 ne・ne
蔡=倉代切 ts'a・ts'e	；	菜=倉代切 ts'e
賴=落蓋切 ta	；	賚=洛代切 le

となり、これはまた、温州音の區別にもよく對應している。

即ち、『廣韻』1等{泰}韻所屬の舌音齒音(ゴシツク)は、『洪武正韻』では、『廣韻』1等{代}韻とともに6{泰}に所屬させながら、それは共通して温州音では/a/韻母を持ち、II等音的扱いを試みている風に見える。言い換えれば、{代}韻と{泰}韻の牙喉音では反切を同じくして同一小韻に屬するところまで達したことになる。

例：蓋=居大切{泰}=溉{代}ke

愛=於蓋切{代}=霽{泰}e

そして、これまた温州音と對應している。

要するに『洪武正韻』6{泰}韻では、

『廣韻』の{代}{泰}の牙音喉音合流 /e/

『廣韻』{泰}舌齒音 /a/

『廣韻』{卦}{怪}{夬}合流 /a/

それは温州音がそうであるからであり、それに依據していると考えてよい。舌音齒音を條件にI等がII等的になるのは山攝の場合と平行した現象である。

付言すれば、

温州音では、「戴」に白/te/、文/ta/の2音が存在する。同様に『洪武正韻』には、

「戴」丁代切・當蓋切

の2音が登録される。

また、

意外なことには元来、合口である上に、『洪武正韻』でも反切は合口で示し、しかも、『洪武正韻』で別に設けた{隊}韻に所屬させず、『洪武正韻』{泰}韻に所屬させる例がある。

例：「外」五塊切 va

「怪」古壞切(表中、便宜、群母に置く) ka

「快」苦夬切 k'a

「嘷」楚邁切 —

「壞」華賣切(表中、便宜、曉母に置く) va

そしてこれもまた見るとおり、温州音では開口/a/で現れ、既述のように温州音の特徴、開合異音現象を示す。

III-5；『廣韻切韻譜』のI覃・II咸、I談・II銜、III凡 → 『洪武正韻』の21覃

これまでに『洪武正韻』6 {泰} でも見てきたことと同様、『廣韻』の I {覃} II {咸}、I {談} II {銜} III {凡} は、『洪武正韻』では {覃} 韻 1 つに纏められている。確かに II 等 {咸} {銜} 重韻と III 等 {凡} 韻は、その韻目の統合が行われ、

監 {銜} = 緘 {咸} = 古銜切

巖 {銜} = 聶 {咸} = 魚咸切

巉 {銜} = 讒 {咸} = 鉏咸切

銜 {銜} = 咸 {咸} = 胡聶切

凡 {凡} = 符咸切

のように反切でも示される。

また、『廣韻』の I {談} 韻の舌歯音では、この II 等字の「監」を用いることが一般で、この点、II 等扱いをしている。そして甚だしくは、從母の「慙」と同音として II 等 {銜} 韻の「讒」= 鉏咸切を登録する。

擔 = 都監切、談 = 徒監切、三 = 蘇監切、藍 = 盧監切

それに對して、I 等 {覃} 韻は獨立性を保ち、{覃} 韻の「含」を反切下字に取る。

要するに『洪武正韻』21の {覃} 韻の内實は、
『廣韻』{談} 韻の舌歯音と II 等 {咸} {銜} 重韻と III 等 {凡} 温州音 /a/
『廣韻』I 等 {談} 韻の舌歯音以外と I 等 {覃} 韻 温州音 /ø/
のように2分され、泰・代重韻は、舌歯音で區別を保ち、それを温州音に求めれば『洪武正韻』とよく對應していることがここでも判明する。

IV；結論

辻本春彦『洪武正韻反切用字考—反切上字について—』(1957「東方學」)では、『増修互註禮部韻略』と『洪武正韻』との反切を嚴密に比較して「『洪武正韻』の據った「中原雅音」の音系が『中原音韻』のそれと非常に近い」、「『韻學集成』に引用する中原雅音と同一のものである可能性がある」と述べる。

最も新しい研究に、玄幸子《『洪武正韻』韻圖序論》(2000「人文科學研究 102」)のように『洪武正韻』韻譜が既に完成しているものもある。(但し、通攝部分のみ公刊)

これら基礎研究の重要性は強調しても強調しすぎることはない。しかし、

反切とその韻圖だけでは決定的な結論には達しにくい。反切の自己完結性は「玉虫色」的に、甲乙丙いずれの方言にも対応する可能性を持つ。

従来『洪武正韻』序文・凡例に指摘する「以中原雅音爲定」の1点に注目が行き、ドラゴノフ・羅常培の言うような、「『洪武正韻』は南北方言の最小公倍数的讀書音」とする見解などもあった。

本論では、『洪武正韻』の序文・凡例に編者が特別指摘するトピックスに絞って、『洪武正韻』での實態を考究してみた。森を見るのに近景だけでもなく、航空写真だけでもなく、中間的風景を捉えるという視点もあるだろう。

そこで、王力が指摘するく『洪武正韻』に濁紐がある。入聲がある。{寒}{刪}が2分されている。>などという諸問題は、その一つには、籍貫が處衢方言区に所属する編者劉基を念頭におくとよく理解できる。現在處衢方言区の調査も進んできたが、今回は、比較的網羅的な調査資料『漢語方言字彙』を利用して、處衢方言区に接近する温州字音に、これら『洪武正韻』の抱える諸問題を解決する糸口があると考え、その地點の字音體系との親近性を発見することができたと考える。また、もう一つには、大局的に見たとき、『洪武正韻』の編集は、中國戲曲史上、南戲は宋南渡後に温州地方に興起したということと深く関わるはずである。早く張世祿の指摘する「南從『洪武』、北問『中原』」の欲求から『洪武正韻』編纂事業がなされたという實態がここに示されていないだろうか。(付表5枚)

(参考文献)

樂韶鳳ら；『洪武正韻』(1973、韓國、國語國文學科叢書所収、亜細亜文化社など)

河野六郎；吳方言における咸攝一等重韻の扱い方について(1978、「東洋研究」53)

青木正兒；『支那近世戲曲史』(1972、1983 [青木正兒全集] 第3所収)

望月眞澄；『洪武正韻』依拠方言(1994、筑波大學文芸・言語學系紀要「文藝言語研究」26)

王 力；『漢語音韻學』(1936、初版・1956など、1983『王力文集』所収)

張 世祿；『中國音韻學史』(1938、初版・1968、『中國文化史叢書』所収など)

辻本春彦；『廣韻切韻譜』(1986、均社単刊)

北京大学；『漢語方言字彙』(1989、文字改革出版社)

『廣韻』 II IIIIV 麻 『洪武』 II 麻 IIIIV 遮		齒音舌		音喉			音齒					
		日	來	喻	影	匣	曉	邪	心	從	清	精
								禪	審	牀	穿	照
平	廣韻II 洪武 麻				鴉 於加 於加 於加 o o	遐 胡加 何加 何加 — —	呀 許加 虛加 虛加 — —		沙 所加 師加 師加 so so	禿 鋤加 鋤加 鋤加 — —	又 初牙 初加 初加 ts'o ts'o	植 側加 莊加 莊加 tso tso
平	廣韻III 麻 洪武 遮	若 人除 — — —						奢 式車 詩遮 詩遮 so sei	蛇 食遮 石遮 石遮 zo zei	車 尺遮 昌遮 昌遮 ts'o ts'ei	遮 正奢 之奢 之奢 tso tsei	
平	廣韻IV 麻 洪武 遮			耶 以遮 余遮 于遮 —				邪 似嗟 徐嗟 徐嗟 ziɔ zei	些 写邪 思遮 思遮 si sei			嗟 子邪 咨邪 咨邪 —

『廣韻切 韻譜』上		齒音舌		音喉			音齒					
		日	來	喻	影	匣	曉	邪	心	從	清	精
								禪	審	牀	穿	照
平	模		盧 龍都 lɔy		烏 汪胡 u	胡 洪孤 vu	呼 荒胡 fu		蘇 孫租 sɔy	徂 叢租 —	麤 倉胡 ts'ɔy	租 宗蘇 ts'ɔy
平	虞魚II							蔬 山徂 səu		弼 = 初楚徂 ts'əu		
平	虞魚III	儒 = 如人余 zɪ	懷驢 =閭 凌如 —	于 雲俱 vu	紆 =於 衣虛 vu		虛 休居 ɕy	殊 尚朱 zɪ	輸 =書 商居 sɪ		樞 抽居 —	朱 =諸 專於 tsɪ
平	虞魚IV			兪 =于 vu				徐 祥余 zei	須 =胥 新於 sɪ		趨 遂須 ts'ɪ	誼 =疽 子余 —

表 1

音 唇				音 舌				音 牙				『洪武』 15麻 16遮 蘇州音 溫州音		
明	並	滂	幫	泥	定	透	端	疑	群	溪	見			
微	奉	敷	非	娘	澄	徹	知							
麻 莫 霞 謨 加 謨 加 mo mo	爬 蒲 巴 蒲 巴 蒲 巴 bo bo	葩 普 巴 披 巴 披 巴 —	巴 伯 加 邦 加 邦 加 po po	拏 女 加 女 加 女 加 no na				牙 五 加 牛 加 牛 加 ŋɔ ŋɔ			嘉 古 牙 居 牙 居 牙 kɔ ko	二 等 麻	廣 韻 切 韻 譜 第 29	
												三 等 遮		
							爹 — 丁 邪 tip tei		茄 — 具 遮 gɔ ga			四 等 遮		

表 2

音 唇				音 舌				音 牙				『洪武』 5模 4魚 溫州音		
明	並	滂	幫	泥	定	透	端	疑	群	溪	見			
微	奉	敷	非	娘	澄	徹	知							
模 寞 胡 mo mɔy	蒲 薄 胡 bu bɔy	鋪 滂 模 p'u p'ɔy	逋 奔 謨 — nɔy	奴 農 都 nəu nɔy	徒 同 都 dəu dɔy		都 東 徒 tɔy	吾 訛 胡 —		枯 空 胡 k'u	孤 公 乎 ku	一 等 模	廣 韻 切 韻 譜 第 11 12	
												二 等 模		
無 微 夫 vu	扶 逢 夫 u vɔy	敷 芳 無 fu fɔy	膚 =敷 女 居 — fɔy	柳 女 居 —	厨 =除 長 魚 dzl	龜 =樞 抽 居 —	株 =諸 專 於 tsl	虞 =魚 牛 居 ɳy	幼 =渠 求 於 dzɳy	區 =墟 丘 於 tɳy	拘 =居 斤 於 tɳy	三 等 魚		
												四 等 魚		

【広韻】 韻譜上		齒音舌		音 喉			音 齒					
		日	来	喻	影	匣	曉	邪	心	從	清	精
								禪	審	牀	穿	照
平	広韻 寒		蘭 落干 郎干 郎干 la		安 烏寒 於寒 於寒 y	寒 胡安 河干 河干 jy	預 許干 許干 許干 hø		珊 蘇干 相干 散 相關 sa	殘 昨干 財干 財娘 za	餐 七安 干安 千山 ts'a	
平	広韻 刪 (山 II仙)		淵 力閑 離閑 離閑 —		煙 烏閑 烏閑 烏閑 —	閑 戸間 何艱 何艱 ha			刪 所茲 師茲 師茲 sa	潺 士山 鋤連 鋤山 —		
平	広韻 先 (元・ IIIIV 仙)		蓮 落賢 靈年 靈年 li	延 以然 夷然 夷然 ji	煙 烏前 因肩 因肩 i	賢 胡田 胡田 胡田 ji	祇 呼煙 呼煙 =軒 虛延 —	涎 夕連 徐連 徐延 —	先 蘇前 蘇前 蘇前 ei	前 昨先 才先 才先 ji	千 蒼先 倉前 倉前 te'i	箋 則前 則前 則前 tei

表 3

音 唇				音 舌				音 牙				【洪武】 9 寒黑体 10 刪行書 11 先明朝体	
明	並	滂	幫	泥	定	透	端	疑	群	溪	見		
微	奉	敷	非	娘	澄	徹	知						
				那干 那干 那干 na	壇 徒干 唐干 唐闌 da	灘 他干 他干 他丹 t'a	單 都寒 都寒 都娘 ta			看 苦寒 丘寒 丘寒 k'ø	干 古寒 居寒 居寒 ky	一 等 寒 刪	廣 韻 韻 譜 第 23 21
蜜 莫選 謨選 謨選 ma		攀 普班 披班 p'a	班 布選 逋選 逋選 pa					顏 五姦 牛姦 牛姦 ŋa			姦 古顏 居顏 居顏 ka	二 等 刪	
眠 莫賢 莫堅 莫堅 mi	蹠緜 部田 蒲眠 蒲眠 bi		邊 布玄 卑眠 卑眠 pi	年 奴顛 寧堅 寧堅 ŋi	田 徒年 亭年 亭年 di	天 他前 他前 他前 t'i	顛 都年 多年 多年 ti	妍 五堅 倪堅 =延 ŋji ji		牽 苦堅 苦堅 苦堅 tɕ'i	堅 古賢 經天 經天 tɕi	四 等 先	

		齒音舌		音喉				音齒				
		日	來	喻	影	匣	曉	邪	心	從	清	精
								禪	審	牀	穿	照
去	廣韻 泰		賴 落蓋 落蓋 落蓋 la		霽 於蓋 於蓋 於蓋 e	害 胡蓋 下蓋 下蓋 hie	飲 呼艾 — — —				蔡 倉大 七蓋 倉代 ts'a ts'e	
去	廣韻 代		賚徠 洛代 洛代 洛代 le lei	愛 烏代 於代 於蓋 e	渣 胡概 下代 下戒 —	儼 海愛 — — —		賽塞 先代 先代 先代 se sei	戰在 昨代 昨代 昨代 tse	萊 倉代 倉代 倉代 ts'e	載再 作代 作代 作代 tse	
去	廣韻 卦			隘 烏懈 烏懈 烏懈 —	遯 胡懈 下懈 下戒 —			曬 所賣 所賣 所賣 sa	皆 士懈 士懈 士懈 —	差 楚懈 楚懈 楚遯 —	債 側賣 側賣 側賣 tsa	
去	廣韻 怪				械 胡介 下戒 下戒 ha	壞hw 胡怪 胡怪 華賣 va						
去	廣韻 夬				嘎 於犗 於邁 於邁 —				寨皆 豺夬 士邁 助邁 —	喂w 楚夬 楚邁 楚邁 —		

表 4

音 唇				音 舌				音 牙				【洪武】 6 w 合	
明	並	滂	幫	泥	定	透	端	疑	群	溪	見		
微	奉	敷	非	娘	澄	徹	知						
味 莫貝 莫貝 莫貝 —	旆 蒲蓋 蒲蓋 步味 —	蒲 普蓋 普蓋 普蓋 p'ai	貝 博蓋 博蓋 博蓋 pai	奈 奴帶 尼帶 尼帶 na	大 徒蓋 徒蓋 度奈 da dei	泰 他蓋 他蓋 他蓋 t'a	帶 當蓋 當蓋 當蓋 ta	艾 五蓋 牛蓋 牛蓋 ŋe	外w 五勿 五勿 五塊 va	磕 苦蓋 丘蓋 丘蓋 k'e	蓋 古太 居太 居大 ke	— 等 — 二 等	廣 韻 韻 譜 代 泰 13 15
樵 莫代 — — —				耐 奴代 乃代 乃代 ne ŋe	代 徒耐 徒耐 度耐 de	貸 他代 他代 他蓋 t'e	戴 都代 丁代 丁代 te ta	碍 五溉 牛代 牛蓋 ŋe		慨 苦愛 口溉 丘蓋 k'e	溉 古代 居代 居大 ke		
賣 莫懈 莫懈 莫懈 ma		派 匹卦 普卦 普夬 p'a						睚 五懈 牛懈 牛懈 —		韞 口戒 口戒 口戒 —	懈 古隘 居隘 居拜 k a		
		拜 普拜 怖拜 普夬 —	拜 博怪 布怪 布怪 pa						怪kw 古壞 古駁 古壞 =夬 ka		戒 古拜 居拜 居拜 ka		
邁 莫話 莫敗 莫懈 ma	敗 薄邁 薄邁 薄邁 ba					夔 丑犢 丑邁 楚邁 —				快w 苦夬 苦夬 苦夬 k'a	犢 古喝 — 居拜 —		

【広韻】 韻譜上		齒音舌		音喉			音齒					
		日	来	喻	影	匣	曉	邪	心	從	清	精
								禪	審	牀	穿	照
平	広韻 i 談 40		藍 魯甘 盧甘 盧監 la			耐 胡甘 胡甘 胡甘 —	蚶 呼談 呼甘 =耐 —		三 蘇甘 蘇甘 蘇監 sa	慚 昨甘 財甘 讒 = 巖 dza		— —
平	広韻 i 覃 39		焚 盧含 盧含 盧含 —		諳 烏含 烏含 烏含 —	含 胡男 胡男 胡男 hø	—		麤 蘇含 蘇含 蘇含 —	蠶 昨含 徂含 徂含 zø	參 倉含 倉含 倉含 ts'ø	簪 作含 徂含 徂含
平	広韻 ii 銜 40					銜 戶監 乎監 =咸 fa			衫 所銜 師銜 師銜 sa	巖 鋤銜 鉏咸 =讒 —	攙 楚銜 初銜 初銜 ts'a	
平	広韻 ii 咸 39				—	咸 胡讒 胡疊 胡疊 fa	—		攙 所咸 師咸 所含 —	讒 士咸 鉏咸 鉏咸 —		
平	広韻 iii 凡 41											

表 5

音 唇				音 舌				音 牙				〔洪武〕 21 覃 〔廣韻〕 〔增修〕 〔洪武〕 溫州音	
明	並	滂	幫	泥	定	透	端	疑	群	溪	見		
微	奉	敷	非	娘	澄	徹	知						
柑 武酣 — — —					談 徒甘 徒甘 徒監 da	訥 他酣 他甘 — —	擔 都甘 儻 都甘 都監 ta			—	甘 古三 沽三 沽三 ky	一等 談	廣韻韻譜 第 39 40 41
				南 那含 那含 那含 nø	覃 徒含 徒含 徒含 dø	探 他含 貪 他含 他含 t'ø	耽 丁含 都含 都含 ta			龠 苦含 苦含 堪 苦含 k'ø	—	覃	
					—			嚴 五衙 魚衙 = 岳 ŋa		嵌 口衙 丘衙 丘衙 —	監 古衙 古衙 古衙 ka	二等 監 ↑ 咸	
							—	岳 五咸 五咸 魚咸 —		—	緘 古咸 古咸 = 監 —		
	凡 符咸 符咸 符咸 va											三等 凡	

佐々木猛；『増修互註禮部韻略切韻譜』（1996、中國書店）

玄 幸子；『洪武正韻』韻圖序論（2000、新潟大學「人文科學研究」102）

寧 忌浮；『洪武正韻研究』（2003、上海辭書出版社）

（本稿は2002年8月26日石家莊における、中國音韻學研究會第12回學術討論會において報告した。その際、南京大學大學院生某氏は、温州は南曲興起の地で、望月論に賛成との意向を示してくれた。さらに2003年5月10日中國文化學會月例會において同一内容を報告した。今回、編集部依頼により活字とすることになった。複雑な表を伴うもので、出版は困難かとあきらめていたが、學會誌上に掲載されることに感謝したい。）

以上